

児童の不安症状と向社会的スキル, 非機能的態度の関連

下津 紗貴¹ 佐藤 健二² 佐藤 容子³

The Relationships among Anxiety Symptoms, Prosocial Skills and Dysfunctional Attitudes in Children

Saki SHIMOTSU¹ Kenji SATO² Yoko SATO³

【問題と目的】

近年, 児童の不安障害に対する関心が高まっている。児童の不安障害は最も有病率の高い問題の一つであり, さまざまな疫学調査の結果をまとめた石川・坂野 (2004) によると, その有病率はおよそ10%弱である。また, 児童の不安障害の維持に関する調査によると, 成人の不安障害と診断される患者の多くが, 児童の頃から不安障害であったと報告している。さらに, 児童の不安障害は, 治療されずにそのまま放置され続けていると, 成長に伴って改善するどころか, より悪化する可能性も示唆されている (Kendall et al., 2000)。

また, ここで注目すべき点は, 児童の不安障害に関する調査の多くが不安障害と診断されていない一般の児童を対象にしている点である。American Academy of Child and Adolescent Psychiatry (AACAP, 1997) によると, 専門的な介入を受けていない児童の中に不安障害の児童が多くいると報告されている。つまり, すでに専門機関に相談して不安障害と診断されている児童だけではなく, 一般児童の中にも不安障害と診断される児童は数多く存在するのである。しかもその中には, 学校場面やその他の社会的場面において不適応を示している者が含まれており (石川ら, 2003), 実際は多くの児童が不安症状に気付かれることなく成長していることになる。

このような事態を引き起こす原因の1つに, 不安障害の児童は親や教師から見て望ましい行動をとり, 賞賛や承認を過度に求める傾向が挙げられる (Kendall et al., 1999)。また, 「私は絶対に他の人から嫌われてはいけない」といった賞賛・承認希求の態度は不安症状との関連が指摘されている (佐藤, 2005)。賞賛・承認希求の態度とは, 非機能的態度の1つであり, 他からの賞賛や承認を過度に求める認知のことを指す。また, 非機能的態度とは, 認知行動療法において, 認知の核となるスキーマのレベルに相当する認知であるといわれている。スキーマ

¹ 宮崎大学大学院教育学研究科

² 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

³ 宮崎大学教育文化学部

への介入は不安障害の再発防止効果があり、欧米では実際に介入が行われている。しかし、児童の不安とスキーマの関連はほとんど検討されていない。

また、石川・坂野（2006）は、高い不安をもつ児童は社会的スキーマの目標が高すぎるために目標に到達できず不安になり、不安からの回避行動として過剰に適応的な行動を示す可能性を指摘している。よって、賞賛・承認希求的態度の検討にあたっては実際に表出しているスキルも測定する必要がある。そこで本研究では望ましい行動を「規律性」と「仲間強化」の2因子から成る「向社会的スキル」と定義し、児童の自己評定によって測定する。

以上の点より、本研究では、「児童の不安症状には向社会的スキルと賞賛・承認希求的態度の両方が影響を与えており、その両方が高い場合に最も不安症状が高い」という仮説の下、児童期不安症状の理解を深めるとともに、そのような児童へのスキーマ介入の重要性を示唆することを目的とする。

【方法】

1. 調査対象

A県内の公立小学校（A校）に在籍する6年生142名、B県内の公立小学校（B校）に在籍する5、6年生113名を対象に質問紙調査を行った。その中で、回答に記入ミスのあった29名（A校14名、B校15名）、発達障害が疑われ、かつ不安得点が著しく高かった1名を除いた225名（A校128名、B校97名）を分析対象とした（5年生男子29名、5年生女子21名、6年生男子76名（うちA校53名、B校23名）、6年生女子99名（うちA校75名、B校24名）：有効回答率87.5%）。

2. 調査材料

1) 日本語版スペンス児童用不安尺度（SCAS；Ishikawa et al., 2009）

児童本人による自己評定によって、児童の不安症状を測定するために用いた。SCASは、Spence（1997, 1998）により作成されたSpence Children's Anxiety Scaleの邦訳版であり、児童の不安症状を測定するために作成された尺度である。SCASは、「分離不安障害」、「社会恐怖」、「強迫性障害」、「パニック・広場恐怖」、「外傷恐怖（特定の恐怖）」、「全般性不安障害」の6因子構造38項目であり、信頼性と妥当性はIshikawa et al.（2009）によって確認されている。

SCASの回答は、項目に示された内容を、普段の生活でどの程度経験するかについて、四件法（「3. いつもそうだ」「2. ときどきそうだ」「1. たまにそうだ」「0. ぜんぜんない」）で評定を求めた。

2) 児童用社会的スキル尺度（向社会的スキル尺度；渡邊ら, 2002）

児童の向社会的スキルの測定には児童用社会的スキル尺度を用いた。児童用社会的スキル尺度は、渡邊ら（2002）によって作成された尺度であり、「仲間強化」「先生との関係」「葛藤解決」「規律性」「主張性」「社会的働きかけ」の6因子構造が確認されている。本研究ではそのうち「仲間強化」と「規律性」の2因子16項目を「向社会的スキル尺度」として用いた。

向社会的スキル尺度の回答は、四件法（「4. いつもそうする」「3. ときどきそうする」「2. たまにそうする」「1. ぜんぜんそうしない」）で評定を求めた。

3) 児童用非機能的態度尺度 (DAIC; 佐藤, 2005)

賞賛・承認希求的態度の測定には児童用非機能的態度尺度を用いた。DAICは、佐藤 (2005) によって作成された尺度であり、「破局的・絶望的態度」「賞賛・承認希求的態度」の2因子構造が確認されている。本研究ではこのうち「賞賛・承認希求的態度」の4項目を用いた。

DAICの回答は、四件法(「4. いつもそう思う」「3. ときどきそう思う」「2. たまにそう思う」「1. ぜんぜんそう思わない」)で評定を求めた。

3. 調査手続き

授業の時間を利用して学級担任が質問紙を配布し、一斉に回答した。調査実施場所は、対象者ができるだけ普段の状態で調査を受けられるように、通常使用している教室を使用した。また、調査の注意点をまとめた「調査の手引き」を学級担任に配布し、調査前に一読してもらい、それにしたがって調査を実施してもらった。質問項目等で不明な点がある場合は、担任教師が適宜対応した。なお、調査方法は全学年共通であった。

【結果】

1. データの等質性

分析を行う前に、まず、A校とB校のデータの不安得点に差が無いことを確認するため、SCAS合計点を従属変数とするt検定を行った。その結果、B校はA校より有意に得点が高かった ($t(175)=5.72, p<.01$)。よって、A校とB校の不安症状には差があることが示されたため、両者を合わせて分析を行うことは出来ず、以下別々に分析を行った。

2. 不安症状と向社会的スキル、賞賛・承認希求的態度の関連

1) 分散分析

向社会的スキル合計点、DAIC得点の平均値に基づき4群を設定した(①スキル低・DAIC低群: A校37人, B校23人, ②スキル低DAIC高群: A校22人, B校16人, ③スキル高・DAIC低

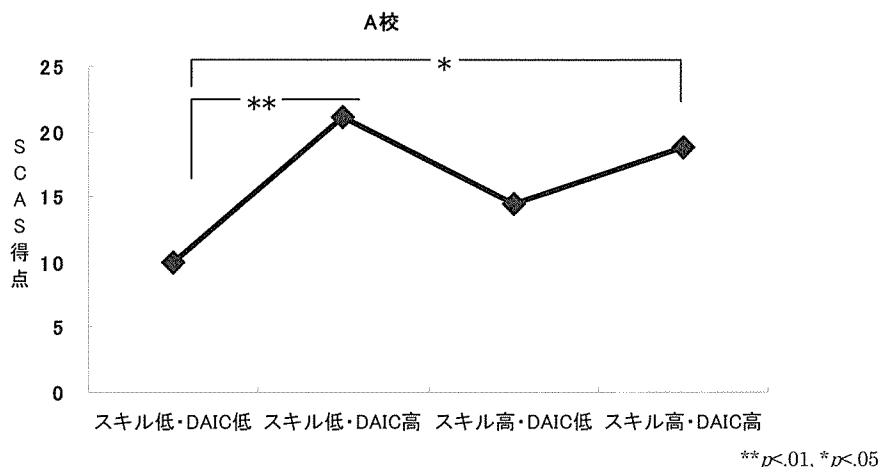


Fig. 1 分散分析A校の結果

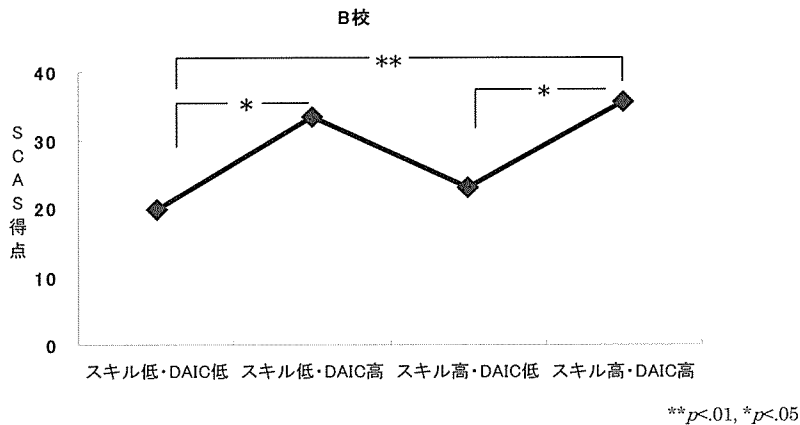


Fig. 2 分散分析B校の結果

群：A校32人，B校31人，スキル高・DAIC高群：A校37人，B校27人）。そして，不安症状について，群を要因とする一要因の分散分析を行った。その結果，両校とも主効果が有意であった（A校： $F(3, 124) = 4.83$ ；B校： $F(3, 93) = 5.82$ ，ともに $p < .01$ ）。さらに，多重比較の結果，両校ともにスキルの高低にかかわらずDAIC得点の高い児童はDAIC得点の低い児童よりも不安が高いことが示された（Fig. 1, 2）。

2) 重回帰分析

分散分析の結果を受け，向社会的スキルと賞賛・承認希求的態度が不安症状に与える影響を確かめるため，向社会的スキル合計点，DAIC，向社会的スキル合計点とDAICの交互作用の3つを説明変数，SCAS合計点を基準変数とし，強制投入法による重回帰分析を行った。その結果，両校ともDAICのみが有意となり，分散分析の結果と同様に，不安症状と関連があるのはDAICのみであった。そこで，両校のデータをまとめて再度分析を行ったが，同様の結果となった（Fig. 3）。

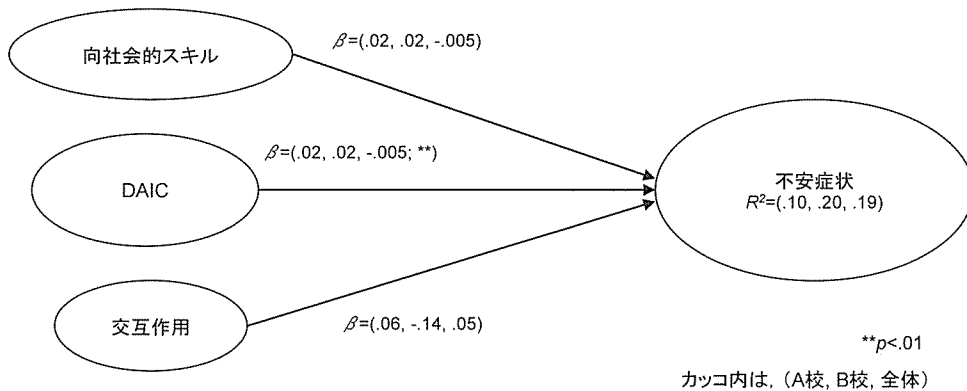


Fig. 3 重回帰分析結果

【考察】

本研究では、児童の不安症状と向社会的スキル・非機能的態度の関連を検討した。その結果、向社会的スキルの高低に関わらず、賞賛・承認希求的態度は、児童の不安症状に影響することが示され、佐藤（2005）の結果と一致していた。今後、不安障害児への治療プログラムにスキーマの変容を取り入れることは、十分有効的であることが示唆された。しかし一方で、重回帰分析の結果、賞賛・承認希求的態度による不安症状の説明力はあまり強くないことが示された。その理由として、すでに不安症状との関連が確認されているネガティブ自己陳述や認知の誤りなどの認知的変数の存在が考えられる。それらの変数はそれぞれ、賞賛・承認希求的態度よりも高い値で不安症状と関連することが明らかにされている（石川・坂野, 2003, 2005）。しかし、どちらも単独で不安症状を説明するほどの説明力はないため、賞賛・承認希求的態度も児童の不安症状に影響する認知的要因の一つと考えれば、不安症状と認知的要因の関係をより詳細に理解できると考えられる。さらに、賞賛・承認希求的態度と不安症状との関係は、不安症状のレベルの異なる両方のサンプルで確認された。よって、「周囲から誉められたい、認められたい」といった考えは、広いレベルの不安症状を予測することが示唆された。

また、本研究では、向社会的スキルと不安症状の関連がみられなかった。これは、スキルの得点が高い方に偏っており、実際のスキルを測定できていなかった可能性が考えられる。本研究で扱った「向社会的スキル」は、ルールや決まり事を守る「規律性」と、友人への積極的な働きかけを示す「仲間強化」の2因子から構成されていた。具体的な項目としては、「規律性」では「クラスのきまりを守る」「先生の話を中心して聞く」、 「仲間強化」では「友だちと協力する」「友だちの気持ちを考えて話す」などが挙げられる。これらのスキルは一般的に用いることが望ましいとされるスキルであり、多くの児童が普段から意識している可能性は十分にある。さらに、不安症状を示す児童はあくまでも、親や教師から見て望ましい行動を示している可能性があるため、児童の自己評定では限界が考えられる。

最後に、今後の課題として、児童の不安障害と関連のある「望ましい行動」をより正確に測定できる尺度を用いて、他者評定の「望ましい行動」と児童の自己評定による不安症状と賞賛・承認希求的態度の関連を再度検討することが挙げられる。

引用文献

- American Academy of Child and Adolescent Psychiatry (1997). Practice parameters for the assessment and treatment of children and adolescents with anxiety disorder. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 36, 69-84.
- 石川信一・坂野雄二 (2003). 児童における認知の誤りと不安の関連について—一児童用認知の誤り尺度 (Children's Cognitive Error Scale) の開発と特性不安の関連の検討— 行動療法研究, 29, 45-157.
- 石川信一・大田亮介・坂野雄二 (2003). 児童の不安障害傾向と主観的學校不適応感の関連カウンセリング研究, 36, 264-271.
- 石川信一・坂野雄二 (2004). 児童の不安障害に対する認知行動療法の展望 行動療法研究, 30, 125-136.
- 石川信一・坂野雄二 (2005). 児童における自己陳述と不安症状の関連 行動療法研究, 31, 45-57.
- 石川信一・坂野雄二 (2006). 自己評定による児童の社会的スキルと不安症状の関連 カウンセリング研究, 39, 202-211.

- Ishikawa, S., Sato, H. & Sasagawa, S. (2009). Anxiety disorder symptoms in Japanese children and adolescents. *Journal of Anxiety Disorders*, 23, 104-111.
- Kendall, P. C., Krain, A., & Treadwell, K. R. H. (1999). Generalized anxiety disorders. In R. T. Ammerman, M. Hersen, & C. G. Last, (Eds.), *Handbook of Prescriptive Treatments for Children and Adolescents (2nd)*. Boston: Allyn & Bacon. Pp. 155-172.
- Kendall, P. C., Chu, B., Pimentel, S. S., & Choudhury, M. (2000). Treating anxiety disorders in youth. In P. C. Kendall (Ed), *Child and Adolescent therapy: Cognitive-behavioral procedures (2nd ed.)*. New York: Guilford Press. Pp. 235-287.
- 佐藤寛 (2005). 児童の非機能的態度が抑うつと不安症状に与える影響 行動療法研究, 31, 177-187.
- 渡邊朋子・岡安孝弘・佐藤正二 (2002). 児童用社会的スキル尺度作成の試み(1) 日本カウンセリング学会第35回大会発表論文集, 93.